



# FD

第11回

# 学生の声コンクール

Hosei University Student Opinion Competition for Faculty Development

## 2018年度(第11回)のキーワードは「多様性」「空気」

第11回を迎えたFD学生の声コンクール。第10回に引き続きキーワード方式で作品を募集しました。今年のテーマは「多様性」と「空気」。大学という「多様性」に満ちた環境でさまざまな「空気」に触れる中、応募者それぞれの世界観、価値観、経験値から大学生活を振り返り、独自の視点から表現した作品が数多く届きました。ともに学ぶ仲間や後輩へのエールになるだけでなく、それを支える教職員への大きな刺激にもなっています。

※学生の所属・学年等、本紙面に掲載した情報は受賞時のものです。



### 「読まなくていい空気がある」

デザイン工学部2年  
勝野楓未



K(空気)Y(読めない)という単語が一昔前に流行った。これは周りの空気を読んで行動することができないという否定的な意味で使われていたが、私はあえて言いたい。「KYであれ」と。

私たちの学部の、ある一般教養の授業は、学部のほとんどの人が履修しているのにも関わらず、授業に出ている人は10分の1以下だった。どこの大学にもそのような授業があるということを他大学の友達から聞いた。それが、大学生の「普通」なのかもしれない。でもそんな風潮が嫌で、私は前期のその授業に出続けた。周りからは「出なくてもいいよ」と言われたけど妥協するのが嫌だった。

後期になって同じ先生の授業がまたあった。当然私はとった。そうしたら、「あなたが前期とっていたから後期はとってみる」と、グループの友達も授業に出るようになった。周りの人も、少しずつ増えていた。自分の行動がいい影響を与えているみたいで嬉しかった。

さらに、その授業は将来には直接関係ないと思っていたが、資格を取るのに必要な内容であったことを後で知った。人生はどこで繋がっているかわからないと感じた。

「みんなが出ないから」という理由で自分も大多数になる、流される。それはとても簡単なことだと思う。みんなと同じ行動をとればいいのだから。

でも、大学という期間が終わり、将来必要とされる人間は、人とは違う行動ができる人なのだと思う。

みんながやらないこと、気づかないところに全力を尽くしていけば、誰かに必要とされると思う。周りにいくらでも代わりがいる人ではなくて、唯一無二の人になりたい。

そんな私にとって「KYだね」は褒め言葉だ。周りに流されずに自分を貫いているということだから。

しっかりやるのがKYなのではなくて、やらないのがKY。そんな風潮になることを願って、私は今日も授業に向き合い続ける。

#### ● 講評 ●

空気を読めない(KY)は否定的な意味で使われるが、この作品の良さは肯定的につかっているところ。さらに空気の逆転(KG?)まで狙っているところも痛快。逆の発想はものさしの両極を知るチャンス。自分の考えや行動の立ち位置が改めてわかり、個性を発揮するチャンスも見つかるかも。逆の発想の意義を示してくれている。



### 授賞式講評



受賞者のみなさん、おめでとうございます。今年度第11回FD学生の声コンクール(以下、声コン)は、応募総数47作品、FD川柳は応募総数119作品でした。この作品の中から、声コンは最優秀賞1作品、優秀賞4作品、佳作16作品、FD川柳は大賞1作品、佳作8作品、入選13作品を選出しました。例年にもまして、独創的で、新鮮な切り口から論じられた素晴らしい作品がたくさん寄せられました。

今年度の声コンは、昨年度と異なり、一人2作品までという作品応募の上限を定めました。これは、多くの学生に校正を重ねた珠玉の作品を応募してもらいたい、重複受賞者を出すよりも多くの学生に受賞してもらいたい・賞金を授与したいという趣旨からです。このような条件変更にもかかわらず、昨年度40作品を上回る47作品の応募がありました。

この47作品のうち、今年度最優秀賞を授与された作品は、デザイン工学部2年勝野楓未さんの「読まなくていい空気がある」です。KY(空気読めない)ということばが2006年、2007年に流行りました。KYは多くの場合、否定的な意味で使われますが、勝野さんは逆転の発想で「KYのすすめ」を、作品を通して主張しています。2段落目の一文「私たちの学部の、ある一般教養の授業は、学部のほとんどの人が履修しているのにも関わらず、授業にでている人は10分の1以下だった」この一文に読み手はショックを受けると同時に興味を掻き立てられます。「出席しなくても大丈夫だよ」と周りから言われますが、勝野さんは授業に出続けます。ここでは勝野さんがKYになるのでしょうか。しかし、徐々に友人にも出席する人が増え、後にこの授業がとても重要であることに気づきます。自分の心の声に素直に従い、ぶれることなく授業に出る。KYを逆転の発想で捉え、大多数の人に流され、授業に出ないことを選ぶことがKYであるという発想と、授業に真摯に向き合い続けることの重要性をこの作品から感じます。優秀賞4作品のうち2作品も、KYの勧めを込めたものでした。

次にFD川柳ですが、今年の大賞は「皆勤賞 名もわからない 友できる」という作品です。この川柳の詠み手「すず」さんは、毎回授業に出ていると、他にも欠かさず出席している学生がいることに気づきます。「今日もいるな」とその学生を見つけてなんとなくほっとしているのかもしれませんが、二人に不思議な連帯感が生まれているのかもしれませんが。心の中で挨拶しているのでしょうか、実際に声を掛け合っているのでしょうか。話はしたのでしょか。この川柳からいろいろなことを想像することができます。声コンの最優秀作品と同様、毎回授業に出ている学生の心の内や様子がわかる作品です。作品を通して、授業はきちんと出席することが基本であり、私たち教員も、真摯な気持ちで授業を行わなければと改めて感じます。

他にも優れた作品がたくさんあります。私たち読み手も多種多様、感じ方も多様です。ぜひこの新聞に掲載されている作品を読んで、いろいろなことを感じて頂ければと思います。